

2007 年度

科目名	対象学科・学年 研究科前英1回生 研究科後英1回生	担当者
米文学研究Ⅱ		高村 博正
授業テーマ John Steinbeck 研究——短編から見た作家の成長と社会批判の交叉点		
授業の概要と目標 アメリカのノーベル文学賞作家ジョン・スタインベックの短編集を精読します。授業の中心柱は、原文テキストの精読と受講生の発表です。文学研究の礎となる精読を前期で集中的に指導します。後期は、短編の多読と短編に関する研究論文の紹介を中心に実習します。文学専攻の院生に対しては文学研究の基礎訓練となります。同時に専攻生にとっては、英語教員としての英語の背景に関する知識を増やし、深める機会です。英語だけではなくて、その背後にある人と社会と文化を同時に学びます。		
評価方法 毎回の実習成果が評価の対象になります。毎回の評価点（100 点満点）の積算を講義回数で割り、その6割以上獲得が評価の基礎点。優良可の評価は従来通り。欠席は-20 点を加算。遅刻は当日の得点を半減。学生←→教師の相互評価を行います。		
テキスト 『スタインベック短編研究——「長い谷間」論』	著者 高村博正	出版社 あぼろん社
参考書 参考書リストと原文テキストは最初の授業で版を指示します。	著者	出版社
授業スケジュール・内容		
1. 入門講義	『スタインベック短編研究』の意義と短所について。	
2. ビデオ「赤い子馬」討論	ビデオ鑑賞のあと、ブレインストームを行います。	
3. 短編精読作品その（1）	作品は授業中に指定します。M o o d l e でレポート提出します。	
4. 短編精読作品その（2）	作品は授業中に指定します。M o o d l e でレポート提出します。	
5. 短編精読作品その（3）	作品は授業中に指定します。M o o d l e でレポート提出します。	
6. 短編精読作品その（4）	作品は授業中に指定します。M o o d l e でレポート提出します。	
7. 短編精読作品その（5）	作品は授業中に指定します。M o o d l e でレポート提出します。	
8. 短編精読作品その（6）	作品は授業中に指定します。M o o d l e でレポート提出します。	
9. 短編精読作品その（7）	作品は授業中に指定します。M o o d l e でレポート提出します。	
10. M o o d l e による実習（1）	時・場所・環境を超えた論文作成支援システムを利用します。添削を中心にします。	
11. M o o d l e による実習（2）	時・場所・環境を超えた論文作成支援システムを利用します。過去の添削を利用。	
12. M o o d l e による実習（3）	時・場所・環境を超えた論文作成支援システム・同時相互評価システムを利用します。	
13. 短編精読作品その（8）	作品は学生が自由に選択します。M o o d l e でレポート提出します。	
14. 短編精読作品その（9）	作品は学生が自由に選択します。M o o d l e でレポート提出します。	
15. 短編精読作品その（10）	作品は学生が自由に選択します。M o o d l e でレポート提出します。	
16. 短編精読作品その（11）	作品は学生が自由に選択します。M o o d l e でレポート提出します。	
17. 短編精読作品その（12）	作品は学生が自由に選択します。M o o d l e でレポート提出します。	
18. 短編精読作品その（13）	作品は学生が自由に選択します。M o o d l e でレポート提出します。	
19. 短編精読作品その（14）	作品は学生が自由に選択します。M o o d l e でレポート提出します。	
20. 短編精読作品その（15）	作品は学生が自由に選択します。M o o d l e でレポート提出します。	
21. 前期筆記試験	授業中に筆記試験を行います。持ち込み可です。	
22. ゲスト・ティーチャー	スタインベックを専門に研究している外部講師の講演を聞きます。	
23. 研究論文調査発表その（1）	各自が調査してきた研究論文の紹介と批評を発表します。	
24. 研究論文調査発表その（2）	各自が調査してきた研究論文の紹介と批評を発表します。	
25. 研究論文調査発表その（3）	各自が調査してきた研究論文の紹介と批評を発表します。	
26. 研究論文調査発表その（4）	各自が調査してきた研究論文の紹介と批評を発表します。	
27. 研究論文調査発表その（5）	各自が調査してきた研究論文の紹介と批評を発表します。	
28. ビデオ「菊」討論	ビデオ鑑賞と討論を行います。	
29. 最終講義	「スタインベックの劇的世界について」。	
30. 最終試験	持ち込み不可です。	
★「ゲスト・ティーチャー」は「実戦アクセス講義」の一環として行っています。		